

第341回 芹沢文学愛好会 御案内

日時 12月18日(日) 13:00-17:00
会場 東中野地域センター 洋室:1~2(1階)
東京都中野区東中野4-25-5-101 TEL 03-3364-6677
テキスト 12月のテキスト
長編小説 『幸福の鏡』 237-307頁
芹沢光治良文学館7 「幸福の鏡」 新潮社 平成8年10月10日発行
第2回(全4回)の予定
例会終了後、同会場で忘年会を予定
司会 小林 茂樹
参加費 500円

「幸福の鏡」

全国大会に関しては1月中間報告。

「奏」希望する方、あと2冊あります。

A:今働いて、家族に運転手がなくてたいへん。土日にいろいろ回ってくる。片思いの状況で進んでいる。直子の場合は大正の娘である。重役とトミ子のお姉さんが妾の関係。交差した感じで物語は進んでいる。2回目で感じたことで、今のいろいろな人とのからみで芹沢先生が書いている。「勝手に偶然性に頼らないで目に見えないものが勝手に筆を進めているのである。」(P292)若い女性は何を考えているか。田中春子は神宮参道200坪の豪邸人間の幸福に同じ家が出てきた。そういうものがあつたのではないか。東洋の西洋の違いなど感じさせるものがあつたと思う。一人一人の感想をふくらませる。

B:おやっと思ったのは、作者の考え方を途中でいれたところ。作家の想像する人間の運命は想像者たる作家よりも偉大にならない。印象的だった。トミ子の生き方は、男性から見てもすごいものだと思った。三人の女性で女子大学の教育というのは一本立ちするのはなかなか仕事がないと改めて思った。次郎が左翼であつたけど、地に着いた生活に戻っている。これからどうなるかと思った。

C:時は昭和13年。男女関は同じにしないという世の中だった。大学は高級花嫁学校だった。お嫁に行くという観念に支配させられていた。

D:昭和13年に書かれた半年ぐらいの連載で自分が女学生に入った時代。皆さんの生活する時代はかなりハイレベルの時代だった。一般的な中のハイレベルという状況。とても一般に人たちの環境ではない。ある程度想像が出来る。生活に上下があっても本質的に求める精神は同じ。自分の生まれた家庭の中での特色を良く表しているのではないか。トミ子さんはいやらしいと思いながら利口だと思う。明大には法科があつた女性が入つた。花嫁学校的な要素が強かつた。日本女子大は花嫁的な要素が強かつた。

E：ブルジョアで「24の瞳」とは全然違う世界。

F：東京はそんな感じだった。

G：良いわけはしたくないけど、そんなに読んでいない。昭和13年は私が生まれる一年前。母から生まれる状況を聞いていた。生活が日常のことが毎日ものを食べていけるギリギリの生活をしていて。夢の国だと思う。ピンとこなかった。下町の生活なのでお醤油を貸して下さいという生活だった。

A：お嬢さんの国際結婚について。ルイズと直子の関係。人種の違いで何かトピックス的な事はないか

H：相手は、世界を飛び回って居た人。地下鉄がないトリノに住んでいる。家族と家族とのやりとりはわりと日本人と近い。娘婿が言うのには、ケープタウンで家族で住んでいた時に「イタリア人」ということで馬鹿にされたことがある。考え方が違うことがある。家族を大切に。一族の関係を大切に。具体的には思い出さない。

A：戦前に国際結婚。英語の先生がフランス人と結婚。

I：月例会は第4というイメージがあった。忘年会が続いてじっくりと読んでいない。文学作品という香りがしない。反面読みやすい。女の園を案内してもらった印象。うまく書いている。男の世界だったら、作者は存分にかけるけど、娘さんが4人いた。娘さんを見て書いて書いたのでは（良いタイミングで娘さんから『でも子供だった』）（一同笑）戦後は、女子大学が増えた。良妻賢母という事を出していた。上流階級のお嬢さま。進学率は、1割いないのではないか。一部のエリートではないか。トミ子みたいな女性は嫌です。春子が一番穏やかに写る。一部の特権階級は名古屋の陶器メーカーなど住まいはすごい。家賃は30円。藤田の設定は、グループ企業を抱えてあちこち得ている。物干し台にお襦袢。鉄砲ぶろ

A：藤田は相当金を持っている。カフスポタンを持っている。木村建設の操作。

J：鉄砲ぶろは意味がある。

A：若い気持ちをとらえていた。

K：今回初めから読んだ。テキストは男の方は気の毒だと思った。うじうじしていやだと思った。人の絡み合っているのか、作者が気がついておやっと思った。トミ子が小川の処に来て一緒に歩く時の会話。小川が迷惑そうにあしらっていくのが印象的だった。阿部光子さんが家庭教師に来ていた。そこから話を聞いたのではないか。小山の長女が阿部さん

お友達だった。戦前の一番良い時代だと思う。夢の世界とは思わなかった。神宮参道の家には知っている人がいたのではないか。誰かの家を頭に書いたのではないか。

L：この小説は疲れる部分がある。トミ子の行動があまりにも卑劣。どんな風に展開するかないことを言いふらしている。人間的にいかがなものかなと思う。人の幸福をねたむような感じがする。あたしはとつてもルイズ夫人のような考え方に感銘を受けた。献身的な態度に感銘を受けた。日本人になりきる努力をするその姿、女中さんに学んでいくその姿に感銘を受けた。春子さんのおうちはすばらしい環境。ケヤキ並木はとても好きだ。古いケヤキ並木に感心しているルイズ夫人を思い出すと新宿にあるケヤキ並木で知らない人から美しいと話しかけられた。ケヤキの無惨に枝を折られた姿をみた。先生が書かれた老いぼれのけやきを思い出した。

M：今回頁は長くないから、ルイズ夫人の生き方（夫の胸を自分の鏡に写せる）感じ方考え方を押さえないといけないキーワード。トミ子自身はブルジョアではない。幸せになるためには玉の輿にのるしかないトミ子自身は思っている。自分の思いだけで走っている。目先だけにいるご時世ではないかというトミ子のこういう事を描いているのはすごいのではないか。経済的に生きて生き方を自立していたのではないか。姉の生き方にドロをぬる生き方を使用としている。はいつくばって生きている。トミ子とお姉さんの関係だった。次郎が言っているのは愛するものを二人が協力して一人前になるというのが、人間は一人で完全になれるのか。二人で一人前になるのはどういうものか。

N：音あの人強いなあと思う。単身の女性は強いなあと思う。

O：昨日ヤマトを見ていたら啼きっぱなし。昼ドラというか俗っぽい小説で会話が多い。新聞小説で朝刊だった。中外商業新報は日経だった。読者というのは女の人がいたのだろうか。新聞小説なので、連載になっているのではめ込んだ状態に鳴っているのを見たい。輸出が滞ってきて、暗い状況になってくる。トミ子の会話が憎らしく先が気になる小説。楽しみにして読んだのだろうか。中身で言い読み応え、ルイズ夫人がすばらしい。小山画伯の方がルイズ夫人ではないか。作家論では違和感。日本人と西洋人のところはすばらしいと思うが浮いているのには浮いていると思った。女子校12年間言っていたけど、円で経験しているので良く書けている。幼稚っぽい感じがした。

ヤマトの搭乗人は、若者のおかげで今があるのではないか。

P：昭和16年に映画になっている。女の人が映画になっている。

Q：読書会は忙しく申し訳ない。長くて大変でね。うわさ話がくどくどしく言い加減に、現代の週刊誌のネタのような感じがする。今月のことだけではわからないけど、最初から最後まで読んだ。作者の筋書きのところがインパクトがあった。作家の想像する運命、などはそれゆえにとつところは登場人物の上には作家の上には行かない。

R：『文学と人生』でも同じように書いている。本人がそう書いている。先生が持って居るのは相当高いもの。

S：ただ、うわさ話がみんなが信じてしまった。私も気を付けよう。高学歴の世界は映画を見るような感じ。東大を出たと噂をする世界。

T：なかなかおもしろい。トミ子。心の貧しいひとではないか。杉方先生は泰然としている。かなり動揺する。勇気ある事だと思う。清水さんの話で日経新聞では、失樂園が載っている。

A：小川はどう思うか。昔の高等文官試験で今の制度とは違う。こういう形である意味の典型的な特権的にエリートだったと悪い印象を与えて居る。

U：石黒さんは高等学校、父は森鷗外の教師。立派にやっていた。君達の公税でと人格的に話していた。

W：久しぶりに来た。小説はあまり好きではないが読んで来るよう心がけてきた。先生の本を読んで疑問に思うのは、エリートの世界ではないか。でも先生の本を読むと人間の幸せの考え方、昭和16年ですごいことだといつも思う。最後のまとめ方はストーンと落ちた。先生は裏切らない。あつと言うところがあった。

A：私の名前茂樹と使われている。私の家内は節子で節子が使われている。

X：春子はしっかりして浮いたところがなく理知的で、次郎の影響を受けて協力しながら生きている。春子さんと違うところはただ一人で生きていく。トミ子は計算高く、天真爛漫で隠せない悪女の範疇にはいるのではないか。春子は次郎を知ることによって俄然行動力が出来てきた。愛情があれば自然と生きていった。お互いに生きていて成長しあっていきっていく。自分一人で生きていく。人間を完成させたいと生きていく。人間は完成することはないと直子に教えていきたい。トミ子にすごく危うげな処がある。小川の無言の闘いを読んでいると精神性は、大切。見解が違くと驚いた。

Y：前回の印象は薄かった。春子はおとなしい人だ。先生の理想とする女性だと思う。良いところのお嬢さまという感じがした。境遇に適用する感じがした。とても手紙群が好きでジーンと来る。いろいろなところに手紙文がある。人間に絶望するところがある。印象的な手紙文で、いいなあと思う。このレイズ夫人のなげさ、日本人に近づく努力、夫に対して常に夫人としての立場。ご主人様の立場は日本人以上

Z：ピンとこない。何処の大学ですか？この高等教育はこんなものですか。それ以上の事を望んでも駄目なのか。男性から導入するかどうか、トミ子の存在はどうしても気になる。本人は悪意でもないけど、トミ子のタイプの存在としているとすれば、「あやうげ」な事

実を認めてあげなくてははいけない。渦中にいたら大変で、この時代の噂は大変。女子教育を考えるのは、大変だと思う。

A：メディアの発達もラディオしかない。

A2：実は、宿題を読んできてない。100回以上はどうかと思った。主人公は3人。砕けた文章。口語体で易しく書いていられる。結構難しい事を言っておられる。いろいろ面白く展開している。昭和13年から14年。作者のテーマで自分の娘達が生き方を探る為に厳粛な気持ちで書いた。作者の意図から手を外れていった。一人の主人公は誰か。モデル論がある。何人もいる。おもしろい。モデルというのは箱のようなものでいくらかいれて想像したりする。岡さんから聞いた。大変面白いと思う。来年の国文学と鑑賞の記念号がでる。110記念号で私もひとつあてられる。大塚兵ごは誰か、そのうちに実際のモデルだとわかり。ひょうごは大塚信、塚本信の妹皆川さんとよくご存じ。モデルの箱。作家の実際のモデルがどういう事か、余りよい趣味ではない。まことにこういう類型的なものではないか。

A：三人の主役の置かれている位置づけ。結婚すると未亡人になるかもしれない。

A3：一回しか読んでいない。出てくる3人の女性。今月の頁を読んでいて恋愛至上主義。恋愛至上主義というのがあって、P254の処に出てくる。作者の意図。三人の意図。三人称で書いてある。トミ子にしてみても会話文からトミ子の心象を書いて行くのは作家としては相当な力量がいる。心理を描く作家の力量は難しい。トミ子を読者に思わせるのは作家の力ではないか。読んでいて飽きが来ない。作品の良さがあるのではないか。新聞小説の意図からして、読みに値するのではないか。芹沢文学の中では得意なものである。作家の創作力はおもしろい。トミ子の創作力はすばらしい。

A4：何を話して良いかわからないけど、新聞小説という特徴的で会話体が多い。新聞小説として受けたのか、イメージーションの中で自分がモデルのではないか、その当時の若い女性の心に刺さるものであるのではないか。西洋人の奥さんとして本当に日本で日本人の男性と生活するのはホンと大変だなあと思う。早稲田大学の先生の奥さんが日本人の男性の事を淡々にその変わり方がある。これはとにかく新聞小説であるので読者として読みやすく日頃の趣を於いてかいているのではないか。

A：夢の中に見た描写とか魂をこめて書いている。力量が計り知れないことを書いている。

A5：昨日の夜から読んで、すごく面白く読んで遅刻して4時に来て失礼なのだけでもこの時代の精一杯いきられた片山さん、小平さんの話を聞きたいと思った。三人の音あのこの話になったと思う。トミ子は面白かった。感情移入した。よくよく考えていたけど、女の子だからということは思わない。もうおそらく半世紀前の作品だけど古典的な名作ではなく現代にあてはめて読んで良いのではないか。この会では、同じ世代はどう思うか。あ

あでもない自分への警告に響いていた。三面鏡みたいな鏡ではないか、P206のお姉さんがこうふくについて鏡にたいしてタイトル決定に持っていたのではないか。年末に短編にすばらしい作品もあるがこういう名作があるとは思う。そういうチャンスを与えたくれた愛好会に感謝する。

A：皇居の方へお辞儀するなど政治や官庁の事で早川さんに質問したが、公務員の方は現状を変えようとしているが、郵政民営化で世の中を変えた印象を持った。1ミリで変えた方が良いのではないか。審議会の定石になっているのではないか。独創的になっていいのではないか。そういうハラで見て、公務員の登場人物

B2：配役はたいしたことがない。これを日本ライブラリーセンター 保存 問い合わせ
鈴木：山脇トミ子が愛人の藤田とあったりするの、嫌だとは思わないのか。

小林：戦前はめかけがいたらしい。不可思議なものを感じている。

C2：小林さんの話のようにおめかけさんがいる家だと聞かせられた。そういう立場にあった人。トミ子のお姉さんが二人の弟妹を帰す。私のような時代でもおめかけさんというイメージがあった。頭の良い娘さんがある。

A：相手が日本人だけど、進駐軍と結婚してアメリカに行った人がいた。

C2：日本人の世界観が変わった。

D2：トミ子をどう思ったか？

E2：トミ子は変わる。

F2：お姉さんが妾を知らなかった。ストレートな性格で出てこない。成り上がりのトミ子は出てこない。

G2：成り上がりのトミ子は出てこない。

H2：結果論がわかっているならそういえるけど。年頃のお姉ちゃん達がどう思うか。今の女の子って、跳ね返っている。

I2：この年特有のものではないか。直子と春子は違いがあるのではないか。玉の輿に乗らないとステータスにのらないと出てこない。成り上がり論は持っていない。平成の時代では、最後まで読んだので違うのではないかと思う。